このような旧套を脱した述懐詩の詠出は、やはり太宰府謫居という、このとき詩人が置かれていた境遇の中で初めて達成されたものと見るべきであろう。

（後藤昭雄「菅原道真の詠竹詩について」『平安朝 文人志』一三〇～一三二頁）

（注二）拙稿「『菅家後集』編纂事情の一考察～巻尾の詩「謫居春雪」の解釈を通して～

（和漢比較文学会編『菅原道真論集』勉誠出版　二〇〇三年二月）